

丹羽勝子

③主婦の仕事づくり—オフィス・ポケット

一—はじめに

オフィス・ポケットは、核家族化が進み、子育て情報のはらんする社会の中で、家事・育児の経験が豊富な主婦が、出産したばかりの若い母親の育児の手伝いや相談相手などを行う「おばあちゃん」の代行業を行っています。

これは、「主婦のための仕事場づくり」の末に行き着いた働き方でもあります。

これから、このオフィス・ポケットの成り立ちと、その事業についてご紹介したいと思います。

二—オフィス・ポケットの成り立ち

①—主婦のための仕事場づくりを目指す

今振り返るとそうです！昭和六十年のある晩秋、夕日を閉ざす雨戸を引きながら、私は何もいえない寂しさと空しさを感じました。知ら

ぬ間に子供たちは成長し、主人も仕事で忙しく、家族そろってくつろげる時間が少なくなっていたのです。

そこで勤めてみようと思い求人欄を見てみると、対象が三十五歳止まりのものが多くことに気が付きました。私は当時四十三歳でした。自分に来ない仕事が多いということを知り、私は大変なショックを受けました。

その当時、主婦たちは少しずつ外へ目を向けていたのですが、仕事の内容にこだわらない人が大半だったようです。私は、他の主婦たちがどんな仕事をしているのか興味をもちました。

さまざまな人たちに話を聞いてみました。その時印象に残ったのは、地域の中で郵便配達代行を行う主婦たちや、他の家庭に向き家事代行の仕事をする主婦たちのことでした。世の中、サービスが仕事になってきていると思ったのです。

- 一—はじめに
- 二—オフィス・ポケットの成り立ち
- 三—オフィス・ポケットの事業
- 四—おわりに

ところが、こうした仕事をする主婦たちも、自信のある仕事のわりには満足に働いていないようでした。賃金の低さと、人間関係で悩むことが多いようでした。

一方、世間一般の主婦に対する働き手としての評価は低く、非難も多かったのです。私が経営者たちから聞いたのは、主婦というのは無責任だから困るということになりました。人間関係の相互の心理がつかめないと、公私混同が激しいとか、仕事にいきまるとやめてしまうとか、本当に困っている様子なのです。

その頃のことです。従業員七十人ほどの会社の社長に、「十五年の経験のある私が女を使いなせないのだから、女が女を使いなせる訳がない。それが出来たら、土下座してあやまるよ」と言われたのです。実は、私が女性だけの会社をつくりようと思ったのはこの時です。

②—「母親業」のマニュアルづくり

主婦を中心にした会社の設立です。能力の差や育った環境が大きく異なる主婦たちが、力を合わせて働いていけるのかという不安もあったのですが、一人ひとり小さい力でも、みんなで力を出し、社会的に意義のある仕事を行うことで、主婦の低い評価を変えていけると思っています。

昭和六十一年四月二十三日、仲間五人の主婦が持ち寄った百万円の資金で「オフィス・ポケット株式会社」の登記をしました。

それからはサービスを仕事にするための模索を続けました。慣れない営業活動をし、涙をだす思いもしました。広告のコピーを書いたり、清掃を請け負うなどの仕事をしながら一年近くが過ぎました。しかし、どんな仕事でもやろうという姿勢ではなく、企業にできないことで、自分たちに行えることは何かを考えていたのです。

そんなある日、主婦が出来ることで、社会的に意義があり、仕事にも出来ること、それは外ならない「お母さん」だと気付いたのです。それは、出産後の母親の相談相手、育児や沐浴の補助、掃除、洗濯、炊事、買い物などを行う、若い母親たちにとっては「おばあちゃん」代行業でもあります。

それはまた、二人目の子供の出産後に無理を

したために、一年間寝付いてしまった自分の体験から思いついたことでもありました。

仲間の間では、「エッ！お母さんの代理？」という賛否両論のなか、準備を進めました。受ける側、手伝う側の両サイドからさまざまな意見を聞き、自分たちの育児経験をまとめて、五カ月後に待望のマニュアルが完成いたしました。そして、この仕事をする人を「マーマ」と名付けたのです。

①「母親業」を世に送り出す

次に考えたことは、こうしてできた「母親業」をどのように世に送りだそうかということでした。

私は、六十二年四月のある日、新聞社を訪ね、今までの思いや、これからやろうとしている仕事の重要性を説いたのでした。しかしこちらの思うほどの反応もなく、何か悲しい気持ちで帰路についたことを覚えています。

しかしこれで終わっては、現在の「オフィス・ポケット」はなかつたわけです。私は再アポを取り付け、担当記者に再び面会の機会を得たのです。次の朝、驚いたことに私たちの仕事が一センチ四方の記事となり、新聞に掲載されたのです。それから数日間、三台の電話が鳴り続け、二百件近い問い合わせに大騒ぎをしたので

した。

ただ、そうした問い合わせの大半は、「こういった仕事をやりたいと思っていました」というもので、やり甲斐のある仕事を選ぶことのできない主婦たちの「うめき」を聞いたようでもありました。「主婦の仕事場づくり」の必要性を痛いほどに感じたことでした。

「オフィス・ポケット」はそんなスタートをきり、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などにも紹介され、しばらくは会社に行くテレビ局が待っているという経験もしました。

そして、全国の主婦の人たちから「自分たちも「マーマ」をしたい」というエールが届きました。北海道から、埼玉から、名古屋からとたくさんの方が相談に訪れました。その結果、「マーマ」の理念を理解し、この仕事に情熱をもつ経営者が次々に誕生していきました。

今では、緑区青葉台の「マーマ横浜」を本部に、北は仙台、南は熊本までの全国十五カ所、千人ほどのマーマをかかえるネットワークとなっています。

各地の事業主は地域性があるので基本的には独立採算の形になっていますが、加盟金と会費を納入して、そのマニュアルを受け継ぐ仕組みになっています。それと、事業主は女性が原則です。

三——オフィス・ポケットの事業

① マーママをシステム

現在は、女性の社会進出が進んだうえに、実家に帰らずに出産する女性が多く、核家族化による「おばあちゃん」不在の家庭も増えるばかりです。しかも、若い母親たちは、雑誌やテレビでさまざまな育児情報を得ています。友人とのおしゃべりがこれに輪をかけて。しかし、どんな子育てがいいのかよくわかりません。このように育児に関する情報は氾濫する一方で、相談相手はいないのです。地域にも身内にもそういう人が少ないし、場もありません。そのため、情緒不安定になりがちなのです。

マーマシステムは、そういった若いお母さんで産後七日以上の人を対象として、午前九時から午後四時までの一日四時間以上をシステムとしています。

マーマシステムは請け負い方式です。同じ人が一週間連続して仕事をします。精神的に不安定なお母さんの手伝いをするマーマが、毎日変わったのではよくないのです。

現在マーマ横浜（本部）に登録をしている「マーマ」は百七十人です。登録されている「マーマ」の中から、勤務地域や時間帯などの条件にあった人を話し合いの上で決定します。

② オフィス・ポケットの運営

私たちの仕事は精神的にはボランティアのようには思っていますが、仕事としてやっていくためには経営的視点が必要です。現在、一カ月に約六十件ほどの仕事を受け、月に三〜四百万円ほどの売上をあげています。

事業形態は代表取締役を中心とした縦型の組織です。長年過ごしてきた家庭の中は、誰が上で、誰が下という関係ではなく、横の関係で成り立っています。こうした主婦特有の考え方、行動を改めて見直してみる必要があると思います。「主婦のための仕事場づくり」の難しさでちなので、責任ある仕事が出来る体制をつくる必要があると思います。

今事務所にいるのは最初からのメンバーが三人、それから一人増え、二人増え、合計七人となりました。こうした内勤のスタッフは、午前九時から午後五時の範囲内で、ローテーションを組んで仕事をしています。

③ その他

私たちは、経験豊かな主婦たちによる、「マーマ」という仕事を通して、育児のノウハウを明日に伝えていく組織づくりをしたいと思います。そのために「マーマ」の研修制度を充実

させています。毎週一回実施され、育児のノウハウを教えたり、「マーマ」のカウンセリングを実施しています。将来的には、「マーマ」自身が、産褥期の母親のカウンセラーになれるようにしていきたいと思っています。

また一九八九年、母と子の研究所を設立しました。専門のスタッフ四人で、育児用品などの調査や育児相談などを実施しています。また、「マーマ」では発足時の客がすでに四歳児を抱える母親になっているので、その要望に添えてベビシッター業を準備中です。

四——おわりに

これからの女性を取り巻く環境は大きく変貌を見せていくでしょう。高学歴の女性が増加し、核家族化が進み、家族の関係や夫との関係も多様化してきています。そうした社会の変化を反映して、これからは子育ても母親だけのものではなくっていくのではないのでしょうか。

そうした時代や社会が変化の中にあっても、変わらずに守って行かなければならないものもあります。若いお母さんたちのよき相談相手となりうる存在に、一人ひとりの「マーマ」がなっていければと思います。

「マーマ」という仕事を通して、社会に役立

つことが出来ればと願っています。

△オフィス・ポケット株式会社代表取締役▽